

ウェブ質問紙調査に基づいた文末形式「くない」の使用実態の分析

趙 凱丹（九州大学大学院生）

1. はじめに

本発表では、10代の若年層が使用する文末形式「くない」の使用状況と使用意図を明らかにすることを目的とする。形容詞の否定形「連用形（～く）＋ない」による規範的な「くない」と異なり、「推しのダンス永遠に見れるくない？」や「グループ交際は無理くない？」に見られる脱規範の文末形式「くない」が若年層間で見聞きされている。脱規範の「くない」に関する従来の研究では、方言学の観点から前接要素に対する容認度に焦点を当てたものが多く、使用者の使用意図に焦点を当てた調査は少ない。そこで本調査では10代の若年層を対象にウェブ質問紙調査を行い、脱規範の「くない」の使用状況および使用意図を考察する。

2. 先行研究および問題点

従来の研究では、方言学の観点から「くない」の前接要素に対する容認度を調べる質問紙調査が多かった。平塚雄亮（2009）や高木千恵（2009）は、福岡市方言や関西方言で「くない」が使われているのに対して首都圏方言で使われないこと、また前接要素として動詞が用いられやすいことが指摘されている。一方、盛田・小島（2016）は、東北地方で使われる「くない」が共起する動詞について、関西地方の結果との相違点を示している。また、近年の「くない」の使用状況について西日本方言話者を対象に調査した黒崎・有元（2021）は、「くない」の共起関係は動詞だけでなく形容動詞、形容詞、名詞にまで拡張されたと述べている。

X(旧 Twitter)から収集された「くない」を用いた調査として津村（2019）と趙（2023）があり、いずれも「くない」の前接要素の拡張と用法を分析している。そのうち、趙は「くない」が用いられるようになった要因の1つとして「言語の経済性」を挙げ、使用者は最も労力を費やさない表現形式（「くない」）を求めているため、形容詞の否定形「連用形（～く）＋ない」が過剰に一般化されるようになったと結論づけている。

先行研究では若年層間で「くない」が多用されていると述べられている。しかし、「くない」の使用実態について、「くない」の前接要素に対する容認度しか調査されておらず、実際の運用において若年層がどのような場面で、あるいはどのような相手に対して「くない」を用いるのか、なぜ「くない」を使うのかという問題については十分に分析されていない。以上をふまえて、本発表では、10代の若年層にウェブ質問紙調査を行うことによって「くない」の使用状況および使用意図を考察することを目的とする。

3. 調査概要

本調査では、若年層間で使われる脱規範の「くない」の認知度、使用場面、使用相手、使用意図を明らかにするため、Microsoft Forms を利用して10代の若年層計88名（男性51名、女性37名）に対してウェブ質問紙調査を行った。

10代の「くない」の使用者は表現の簡潔さを求め、くだけた日常会話やSNS上のやりとりで、友人などの親しい関係にある相手に対して、同意を求める際に「くない」を用いるという仮説を立てた。そこで、調査にあたり、以下の3つの課題を設定した。

- ① 「くない」に対してどのような認識を持っているのか
- ② 「くない」はどのようなときに使うのか
- ③ 「くない」の使用意図はどのようなものであるか

4. 調査結果

4.1 「くない」に対する認識

被調査者88名に対し、「推しのダンス永遠に見れるくない？」と「グループ交際は無理くない？」に用いられる「くない」を知っているか否か、脱規範の「くない」に対してどのような認識を持っているかを調査した。その結果、77名(78%)が「若者ことば」として認知している。一方、脱規範の「くない」を知らない被調査者が1名、また「方言」と認知している被調査者が4名いた。この5名の共通点は言語形成期または現在九州地方で過ごしていることである。ただし、言語形成期を九州地方で過ごしているものの、「くない」を「若者ことば」として捉えている被調査者はより多かった。そのため、「くない」の方言としての扱いと言語形成期に生活していた地域が関連性を持っているとは言いがたいだろう。

4.2 「くない」の使用場面

88名のうち、87名が「推しのダンス永遠に見れるくない？」と「グループ交際は無理くない？」に用いられる「くない」を知りながら、実際に脱規範の「くない」を使ったことがある被調査者は66名(全体の75%)であった。この結果から、「くない」の使用状況が認知度と等しいとは言いがたい。

「くない」の使用場面について、「くない」は「友人との日常会話(話しことば)」で最も用いられやすく、その次が「家族との日常会話(話しことば)」、「後輩などの目下との日常会話(話しことば)」、「SNSなどのネット上でのやりとり」である。

また、これまで「くない」は若年層間の親しい間柄でしか使えないと考えられてきたが、親疎関係および上下関係が全く異なる「目上やお客さんとの日常会話(話しことば)」で使うと回答した被調査者が2名いた。ただしこの場合、「くない」の丁寧形「くないですか」が用いられることが予想される。

4.3 「くない」の用法

「くない」の用法について、趙(2023)の「意見の表明」、「確認要求」、「同意要求」、「否定」、「不完全受容」という5つの用法分類に従い、どのようなときに「くない」を使うのかを調査した。その結果、同意を求めるために使う被調査者が51名(32%)で最も多かった。2番目に多いのは、ある事柄を相手を知っているかどうかを確認する際に用いられる「確認要求」の用法(25%)である。それに対して、同じ「確認要求」のうち、相手にある事柄の真偽性について確認を求める用法では「くない」の容認度が低くなる(7%)。ここから、従来の研究(平塚, 2009; 高木, 2009; 黒崎・有元, 2021)で指摘されたように、「くない」は「同意要求」の用法で最も用いられやすいことが分かった。一方、「確認要求」の2つの用法に見られる使用傾向の差異は新たな発見である。

4.4 「くない」の使用意図

なぜ「くない」を使うのかを調査した結果、「意識せず使う」という結果が最も多かった。2番目に多いのは「短くて簡潔で使いやすいから」である。ここから、「くない」が若年層間で多用されるのは「くない」という表現形式の簡潔性と関係することが明らかである。次いで、高木(2009)や趙(2023)の指摘した、「くない」によりもたらされる緩和機能である。つまり、「くない」の多用は語用論的な効果を果たすためとは限らず、むしろ言語使用者が発音上の利便性を追求して短めの表現形式を求めているというほうが適切である。この結果は、趙(2023)で立てられた、「くない」の使用は「言語の経済性」によるものという予想も裏付けたと言える。

4.5 「くない」の言い換え

「くない」に言い換えがあるか否かを調査した結果、言い換えがあると考えられる被調査者は使用者の半分以上を超えて74%に達しているのに対して、言い換えがあると考えない被調査者は26%である。言い換えがあると考えられる被調査者が記入した言い換え表現のうち、「じゃない」は他の表現より顕著に出現回数が多いことから、「くない」の言い換えとして最も用いられやすいと考えられる。そのほか、「よね」、否定を表す「～ない」や「ん」、接尾辞「っばい」、「くない」の変形「くね」、地域方言「やない」や「ことない」も観察された。ただし、「くない」は多様な表現と類似しているものの、実際の運用においては「くない」と類似表現は明確に使い分けられている。以下、言語的な観点と言語外の観点から使い分けを調査した。

まず、言語的な観点から用法別に「くない」の言い換えを観察した。言い換えとして「じゃない」、「～ない」、「よね」は多用されているが、用法によって形式間の使用傾向の差異が見られる。相手に同意を求めたり相手にある事柄を知っているかどうかを確認したりする際、「じゃない」が用いられにくいのに対して、「～ない」と「よね」が用いられやすい。ただし、「私って、お菓子が好きくないですか」のように、形状詞が前接する際には「じゃない」が使われる傾向がある。一方、相手にある事柄の真偽性に対して確認を要求したり話し手が自分の主張や意見を表明したりする際には「じゃない」が最も用いられやすい。ただし、「ねえ、これ、いいと思うくない?」のように、「思う」を用いて真偽性を問う場合、否定疑問文「いいと思わない?」に言い換える傾向がある。地域方言「やない」や接尾辞「っばい」は話し手の主張や意見を表す際、もしくはある事物や人物の特性を表す際という限られた文脈で言い換えとしての容認度が高い。

次に、使用領域、使用相手、使用頻度という言語外の観点から使い分けを調査した。「くない」は日常生活のカジュアルな会話場面で友人や家族という親しい間柄に限って用いられる。一方、類似表現は場面や相手を問わず、また話しことばにおいてもチャットを含む書きことばにおいても頻繁に用いられる傾向がある。そして、明確に意志表示をしたい場合や、文脈によって理解されにくい、話しにくいと判断される場合には、社会に浸透している類似表現が用いられる。また、使用頻度について、友人に合わせて「くない」を使う被調査者もいれば、極力「くない」を使わないように気をつける被調査者も多く見られた。

5. 考察

「くない」の使用状況は、コード・スイッチングの概念とアコモデーション理論で解釈できる。使用者は常に使用領域や人間関係によってコードの切り替え（「くない」を使うかどうか）を行うことがある。また、相手との距離を縮めたい場合もしくは相手との親しさを示す場合、相手に合わせようとして相手の使うことば（「くない」）への切り替えが見られる。これはアコモデーション理論に当たり、相手の使ってい

ることばに同調したり自身のことばを収束したりすることである（石黒圭 2013）。

「くない」は若者ことばと認知されながらも、実際の運用においては、従来言われる若者ことばの機能（米川明彦 1998）との齟齬が生じている。多くの使用者は言語の経済性を重視しており、簡潔さを求めている。また、「すごいくない」について、その言い換えとして「く」が脱落した「すごい」を挙げている被調査者が2名おり、この2名はともに近畿地方で言語形成期を過ごしていた。ここから、脱規範の「すごい」は関西地方で使われる方言であると予想される。Xで検索してみると「やばない」（「やばい」）、「はやない」（「早い」）、「おそない」（「遅い」）の使用も散見されたものの、SNSの不特定という特徴のためこれらが関西方言話者による発信であるかどうかは不明である。とは言え、「く」の脱落により得られる「〇〇ない」という形式は、より一層言語の省エネルギーが進行していると考えられる。「形容詞基本形+くない」や「形容詞の語根+ない」の使用は、今後の形容詞をめぐる変化の可能性と方向性を示している。

6. まとめ

本発表は、10代の若年層を対象にウェブ質問紙調査を行なって若年層間で多用される「くない」の使用状況と使用意図を調査した。その結果、「くない」は若年層間で広く知られながらもそれに等しい使用率に達しているとは言いにくく、親しい間柄に限り使われている表現形式である。ただし、個人差があり、極力使わないよう気をつける人も見られる。実際の運用においては、従来指摘された「同意要求」の用法のほか、相手がある事柄を知っているかどうかを確認する際にも「くない」が用いられやすいことが分かった。若年層間で「くない」が多用されるのは、言語使用者が簡潔性を求めているためである。今後、省エネルギー化は若者ことばの誕生の一要因として重要な位置を占めると考えられる。

参考文献

- 石黒圭 (2013). 日本語は「空気」が決める—社会言語学入門— 光文社
- 黒崎貴史・有元光彦(2021). 西日本方言話者の用いる「クナイ」について 山口大学教育学部研究論叢, 70, 273-282.
- 米川明彦 (1998). 若者語を科学する 明治書院
- 高木千恵(2009). 関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイについて 日本語の研究, 5(4), 1-15.
- 趙凱丹 (2023). 文末形式「くない」の前接要素と用法—Twitter データに基づく分析— 日本語學研究, 75, 175-194.
- 津村彩子(2019). 新しい接尾語「クナイ」の使用実態とその拡大について 言語の研究, 5, 1-16.
- 平塚雄亮(2009). 動詞肯定形に接続する同意要求表現クナイ(カ) 日本語文法, 9(1), 71-87.
- 盛田紗緒莉・小島聡子(2016). 東北地方若年層の用いる文末形式「～クナイ」について 岩手大学人文社会科学部紀要, 97, 29-42.